

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

(平成 27 年度第 3 回研究会)

日時：平成 28 年 3 月 18 日（金曜日）午後 2 時より 6 時

場所：AA 研大会議室（303）

共催：科学研究費基盤 A「イスラーム国家の王権と正統性」

報告 1

Satoshi OGURA (Kyoto University)

“Lakṣmī Becomes Dawla: Remarks on the Translation Strategy of Notions of Kingship in a Persian Translation of the Rājatarāṅgiṅīs and the Following Chronicles”

小倉報告は、ラージャタランギーと総称されるサンスクリット語で著されたインド・カシミール地方の歴史書群がペルシア語に翻訳される際に、当時の政権の正統性を担保するためにどのような戦略がとられたかを論じたものであった。特にヒンドゥーの神々に関するサンスクリット語とペルシア語テキストの厳密な比較により、いくつかの興味深い発見が示された。たとえば、一般的な創造主を示す語は、ペルシア語訳ではアッラーと訳された。シヴァ神については、ペルシア語訳ではシヴァ神の別名であるマハーデエヴァの音写を用いる例が見られた。場合によっては、ヴィシュヌ神やシヴァ神がハック（真実・神）とされる例もあった。

もっとも興味深いのは、ヒンドゥーの幸運の女神ラクシュミーの場合である。これは完全に非人格化され、ダウラ（幸運）という語に訳された。他の神々とは異なり、ラクシュミーのみはそのまま訳すことができなかったことを示している。内容の大枠を保ちつつも、当時の政権にあわせたイデオロギー的操作のあり方をうかがうことができる。

報告 2

A. Azfar Moin (The University of Texas at Austin)

“Universal Peace and Sun Worship in Mughal India: A “Hermetical” Revival in Islam?”

モイン報告は、ムガル朝皇帝アクバル（位 1556-1605）の、偏見を排してすべての宗教を統合しようという有名な政策 *sulh-i kull*（普遍的平和）の背景を、壮大なスケールで描いたものであった。アクバルはこの政策により、自らの身体を、イスラームを越える存在として位置づけた。モイン氏の議論は、君主の聖性が、聖典に基づく権威に優越するというこの考え方がどこから生まれたかというものであった。氏によれば、太陽信仰と結びついたその考え方はヘルメス主義というべきもので、古代エジプトに端を発したであるという。こ

の思想は、一神教の誕生以降、そのなかに密かに取り込まれ、折に触れて表面化してきた。たとえば近世ヨーロッパにおけるヘルメス主義は、やはり太陽信仰と古代宇宙論に傾倒した。アクバルの「普遍的平和」もこの文脈で考えることが可能である。イスラームにおいても、密かに組み込まれていた古代の伝統が、アッバース朝の滅亡以降、徐々に表面化し、アクバルのもとでその頂点に達したとするのである。

きわめて大胆な仮説であり、参加者のほとんどがその議論についていくのが精一杯という状況であった。しかし、少なくとも、アクバルの「普遍的平和」を説明する従来の説が、十分な説得力がないことを考えると、モイン氏の野心的な挑戦は評価されるべきであろう。また、ポスト・モンゴルのイスラームの王権のあり方を考える上で、氏の議論は無視できないものであることは確かである。

(文責：近藤信彰)